

告示	番号	7	慢性消化器疾患
	疾病名	肝硬変症	

肝硬変症

かんこうへんしょう

概念・定義

肝硬変は慢性肝疾患による肝細胞壊死が至る終末像である。病理学的に肝細胞の壊死と線維化による小葉改築、再生結節を呈する。肝臓の循環障害と肝細胞の極端な減少が基本的病態である。

症状

代償性肝硬変は肝機能が比較的保たれており、自覚的・自他覚的・自他覚的の症状は認めない。

非代償性肝硬変の主要症状は成長障害、易疲労性、低栄養である。身体所見は肝腫大（主に左葉）あるいは肝萎縮、脾腫、手掌紅斑、クモ状血管腫、腹壁皮静脈怒張、女性化乳房、羽ばたき振戦などがある。

治療

続発する合併症に対する対処療法が主となる。

栄養：

高蛋白食（2 g/kg/日）、高糖質、高ビタミン食とするが、胆汁うっ滞があれば低脂肪食、中鎖脂肪投与を行う。肝性脳症急性期には厳重な蛋白制限が必要である。

薬物療法：

胆汁うっ滞があれば利胆薬、脂溶性ビタミン（A、D、E、K）の投与を行う。

非代償性肝硬変で浮腫や腹水が認められる場合には塩分制限を行い、低蛋白血症があればアルブミン、利尿薬投与を行う。

肝不全徴候が顕在化してくれば分岐鎖アミノ酸製剤を投与する。

消化管出血についてはヒスタミン H₂ ブロッカー投与、内視鏡的効果療法などで対応し、大量出血の場合は Sengstaken-Blakemore チューブによる止血を試みる。

肝移植：

現時点では肝不全が進行した場合の唯一の治療法である。

本邦では生体肝移植が主流であるが、臓器移植法改正後、徐々に脳死肝移植が増えてきている。

抜粋元：http://www.shouman.jp/details/12_14_26.html